

# 日中平和に命を賭けた 母「テル」を想う

——暁子さんが生後9カ月だった際に、母親のテルさんが亡くなりました。暁子さんにとって、テルさんとはどのような存在ですか。

日中国交回復以降、母親は日本でも有名になったのですが、個人的には親子としての縁は薄かったのです。私自身、両親のことを詳しく知るようになったのは30歳を過ぎた日中国交回復後でしたが、しかし、ずうっと形のない影のような存在として、私の後ろにいるような気がしているのです。もちろん、私にとっても、大事な人と言えらるでしょう。

——戦前に「売国奴」とののしられながらも、戦争反対、日中の和解を主張し、最後まで信念を貫いたのは、すごいことですね。

私自身も、母はすごいと思います。自分の国が中国の人々を苦しめることに対し、「裏切り者」と言われ、身内に反対されても、エス

ペランチストとしての「人類愛」から許すことができなかったのです。今も、初めて母の存在を知った日本の方は、「え！こんな人が戦争中にいたの」と驚くようですね。できれば、皆さんがこれからの子どもたちに、「こういう人がいた」と教え続けてほしいと思います。あのような時代に決して沈黙せず、戦争に反対した人がいたのは、とても大事なことでないかと考えるのですが。

**過去の侵略を忘れるな**  
——賛成です。  
ただ、母が日本と中国のために命を賭けてやったことを考えると、私は現在の状況をとっても残念に感じています。日本は素晴らしい国だと考えているし、国民もみな優しい。しかし、過去の中国に対する侵略という歴史的事実に対し、どこか態度が曖昧なのではな

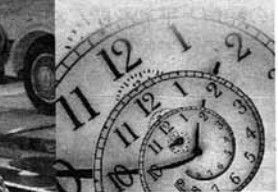
いでしょうか。日本と中国の友好のために努力し、憲法改悪を阻止するために頑張っている方々はたくさん知っています。日本は人全体としては、はたしてどうなのでしょうかね。

日中戦争の時代、エスペランチストの長谷川テルは、中国で日本兵に反戦を呼びかけた。その娘の暁子さんは今、悪化した日中関係を憂いながら、母の生き方を語る。

## 長谷川暁子さんに聞く



1979年8月、兄の故・劉星氏（左）と共に初来日し、長谷川テルの実姉の西村ユキさん（右）と面会した暁子さん（中央）。（提供／時事）



現在の暁子さん。（提供／別府良孝）

「指摘の通りです。このままだと、テルさんをはじめ「日中不戦」を訴えてきた先人たちの努力、そして日中の「恒久的な平和友好関係を

確立する」と誓った1972年9月の「日中共同声明」が、無意味なものになりかねません。  
特に、第2次安倍晋三政権になってから、尖閣の問題がますます刺々しくなっています。何か、「中国の脅威」ばかり煽って、とても心配になります。かつては、この問題は日中間で「棚上げ」にすることにしたはずなのに。日本が中

## 長谷川テルの生涯

「お望みとあれば、どうぞわたしを裏切り者とよんでくださって結構です。わたしはこれっぽっちもおそれません。むしろわたしは他民族の国土を侵略するばかりか、なんの罪もない無力な難民のうえにこの世の地獄を現出させて平然としている人びととおなじ民族のひとりであることを恥とします」

長谷川テルの日本宛手紙より

に参加するため帰国した後の37年4月、夫を追いタイプライターを持って横浜港から中国へ発つ。

以後、上海や広州、重慶等を転々としながら、中国の抗日闘争をエスペラントで世界に紹介し、「日本帝国主義の打倒」と「日中両国民の団結」、「人類平和」を訴えるさまざまな出版活動に従事した。

日本の敗戦後、テルは夫とともに佳木斯市の東北社会調査研究所研究員に任命されるが、47年1月14日、妊娠中絶手術がもとで死亡。劉仁もその3カ月後に病死した。後には長男の劉星（1996年死亡）と劉曉蘭（長谷川曉子）の2人の子どもが残されたが、それぞれ別々に引き取られて成長した。

来年で没後70年になるテルの鮮烈な生き様は、時代を超えて私たちに平和のために何を為すべきかを教えてくれている。（成澤宗男・編集部）

「祖国日本に弓を引く覆面の売国奴女性」「祖国へ毒づく“赤”くずれ」。日中戦争が全面化していた1938年11月1日、『都新聞』（現『東京新聞』）は、中国戦線で日本兵に戦闘停止を訴える放送を流していた長谷川テルを、このように報じている。

エスペランチストだったテルは、夫の中国人留学生だった劉仁とともに戦渦の大陸で反戦活動に従事。国民党中央宣伝部国際宣伝処の対日科に所属して、武漢で「抗日反戦」のラジオ放送のアナウンサーとなった。「誤って血を流してはなりません。あなた方の敵は海を越えたこちら側にはいないのですから」と訴えるその声は、日本兵に一定の動揺を与えたという。

中国の教科書にテルは「革命烈士」として記述され、黒竜江省佳木斯市の劉仁と眠るその墓には、「国際主義戦士」と刻まれている。

日本では中国と国交を結んだ1972年から、「日中友好ムード」にわたった80年代の前半にかけて、テルへの関心が「日中不戦」を掲げた先駆者として高まった。

しかし、尖閣諸島での「日中軍事衝突」があたかも避けられないかのような扇動めいた情報や出版物が横行している現在、テルの名が語られる機会は乏しくなっているのは否めない。だが、このような今だからこそ軍国主義が荒れ狂った中国との戦時下で抵抗を止めず、日中の和解と平和を訴え続けた良心として歴史の中で彼女を正当に評価し、語り継いでいくことに意義があるはずだ。

テルは1912年3月に山梨県大月市で生まれて東京で育ち、29年に奈良女子高等師範学校（現奈良女子大学）に入学する。在学中にエスペラントを学び、社会への関心から左翼文化運動や労働運動の関係者と接触を持つが32年9月11日、寄宿舎で特高に逮捕。退学処分となり、帰京を余儀なくされた。

その後、東京でエスペランチストの活動に従事し、小林多喜二の「蟹工船」のエスペラントの翻訳等に携わり、「婦人エスペラント連盟」を36年に結成。同年に知り合った劉仁が抗日闘争



長谷川テルと劉仁の結婚写真。（1936年秋。提供／朝日新聞社・時事通信フォト）

国と戦争して、何もいいことはありませんよ。お互いに国として「引越し」はできないのですから、とにかく仲良くするしかないじゃありませんか。

——お母さんが今の日本の姿を知ったら、お嘆きになるでしょうね。

過去の歴史的事実については、否定することはできません。安倍首相も、「8月15日」や「原爆投下の日」に、自国のことばかり言わず、日本以外の犠牲者に対して少

しても哀悼の意を表したら、アジアの人々の感情は変わると思いますが。

——お父さんは中国人で、「二つの祖国」があたりです。その「二つの祖国」が仲違いすると辛くなると、「著書で書いておられますね。

そうなのですが、今後、仲良くなる兆しはあるのでしょうか。それを考えると、いつも耐えきれないぐらい悲しい気持ちになります。

聞き手／成澤宗男・編集部

はせがわ あきこ・1946年4月14日、中国・瀋陽生まれ、小学校から高校まで、ハルビン市で育つ。唐山鉄道学院電力工学部卒業後、寧夏回族自治区中衛鉄路職工子弟学校、北京鉄道第二七機車工廠職工大学で勤務。1985年以降、奈良女子大学や福島大学に留学。92年に日本国籍取得。現在、同志社大学で中国語非常勤講師として勤務。著書に、「二つの祖国の狭間に生きる」（同時代社）。